

<資料>

翻訳関連文献の集成について(3)

長沼美香子

『日本の翻訳論』(法政大学出版局、2010年)の巻末に、「文献案内 さらなる研究のために一日本における翻訳論への水脈」として、翻訳関連文献の集成を試みた。特に雑誌の翻訳特集に注目した直接の理由は、「エピテキスト」(翻訳テキストの外側にあるパラテキスト)としての価値に注目したからであるが、と同時に単行本よりも文献収集が相対的に困難でもあるからだ。主要なものを手作業で整理するという方法を用いたが、今後ともこの方向で作業を継続して一層の充実を図りたいと考えている。そこで、ウェブ版『翻訳研究への招待』に「文献案内補遺」を随時掲載する。文献の基本項目は、『日本の翻訳論』の「文献案内」にできるだけ倣うが、「誌名、巻・号、特集名、出版社、目次、編集後記など」以外にも、特筆すべき点があれば追加する。

今回、補遺としてリストに加えたのは、翻訳特集を組んでいる『JunCture 超域的日本文化研究』第3号、『文学』第13巻第4号、『早稲田文学』5号、『現代詩手帖』第55巻第10号という文学関連の4誌。たまたま『早稲田文学』は先日第148回芥川賞を受賞した話題の黒田夏子さんが表紙で、その受賞作「ab さんご」も掲載されていたのだった。

文献案内 補遺『日本の翻訳論』以後の追加情報(3)

『JunCture 超域的日本文化研究』第3号、名古屋大学日本近現代文化研究センター、
2012年3月

「特集 文化の越境と翻訳」

美とアイデンティティ——グローバル化時代の文化的自己主張／イルメラ日地谷＝キルシュネライト

日本現代文学と翻訳の視野／セシル坂井

現代日本のトランスナショナル文学論のために——シリル・ネザマフィ「サラム」と翻訳の表象／日比嘉高

中国における日本の「推理小説」の受容の様相——「改革開放」以後の翻訳傾向を中心に／康東元

伊勢物語における「みやび」——和漢比較の観点から／大井田晴彦

中国大陸における日本文学の教科書について——志賀直哉の作品「城の崎にて」を中心に／呉保華
英華辞典と英和辞典との相互影響——20世紀以降の英和辞書による中国語への語彙浸透を中心に／

陳力衛

モノが知識を伝えるには——博物館展示物の哲学的考察／秋庭史典

『文学』第13巻第4号、岩波書店、2012年7,8月

「特集 翻訳の創造力」

翻訳文学とジャンル生成・試論——谷崎潤一郎と佐藤春夫の翻訳と散文詩の試みをめぐって／井上健 ランボアの詩の翻訳について／湯浅博雄

明治翻訳界のフロンティア——黒岩涙香の余裕訳／堀啓子

文化史としての翻訳学——川島忠之助の『新説 八十日間世界一周』の事例／J. アンゲルス
明治期文藝の翻訳／加藤百合

タスカー考——「ふさぎの虫」から「せつない」へ／沼野充義

逐語訳の技法——中村真一郎訳『暁の女王と精霊の王の物語』をめぐるいくつかの疑問から発して／三枝大修

境界線の探究——カフカの編集と翻訳をめぐる／明星聖子

日本文学のなかのナボコフ——誤解と誤訳の伝統／秋草俊一郎

話芸の翻訳——読まれるテキストと演じられるテキスト／M. マストラランジェロ

野上豊一郎の「創作」的翻訳論をめぐる——翻訳の文化史へ／鈴木貞美

〔文学のひろば〕初めての翻訳／中島京子

逃げてゆくマルテ／松永美穂

「世界文学」の新しいパラダイムの展開と展望——ラテン文学と古代日本文学を例として「世界古典比較文学」論へ／W. デーネーケ

『早稲田文学』5号、早稲田文学会、2012年9月

「特集 翻訳という未来」

座談会 十二人の優しい翻訳家たち——グローバルに移動する小説を追いかけて

泉京鹿、岩本正恵、貝澤哉、辛島デイヴィッド、きむふな、武田千香、堤康徳、都甲幸治、
松永美穂、柳原孝敦、芳川泰久、青山南

大型翻訳新連載

儀式／セース・ノーテボーム（松永美穂訳・解説）

クィシ／タチャーナ・トルスタヤ（貝澤哉、高柳聡子訳）

ホワイトノイズ／ドン・デリーロ（都甲幸治訳・解説）

もどってきた鏡／アラン・ロブ＝グリエ（芳川泰久訳・解説）

【特集まえがき】

「翻訳をするには、その国に暮らし、言葉ひとつひとつの表層的な意味だけでなく、それが持つ背景や歴史、匂いや質感までも捉えられなければならない」二十世紀の末にそう聞かせてくれたのは、いまは亡き或る仏文学の翻訳家だった。みずからの身体をも他国と他国語に溶け込ませてこそ、翻訳家は異国の言葉とみずからの母語とを繋ぐ媒介でありうる——その原則は、むろん十

数年を経た今も変わるまい。

だが、世界のネットワーク化が進んだ現在、「どの言葉で書くか」「どこで読まれるか」ははるかに流動的なものとなりつつある。複数の言語で「書く」者も複数の言語で「読む」者も増え、ひとつとところにあっても無数の外部からの言葉が飛び込んでくる二一世紀とは、「同じ国にあって同じ言語を用いて見えてもその言葉がけっしてひとつのものでありはしない」というあまりに当然の事実が、誰もが無際限に言葉を発せられる Web の存在によって初めて具現化しつつある今日とも、表裏一体のものでもある。

言い換えればそれは、私（たち）が今日単一の言語圏のなかで直面する齟齬や苛立ちそして喜びと快楽に、先んじて塗れてきたのが「翻訳」に携わる者たちであり、その所産が翻訳小説だった、ということでもあるだろう。

或る国の、或る文脈のなかでだけ考え、書いたことが「小説」に（さらには文化に）なる時代は、複数の意味で終わりつつある。国内のみで書かれる作品やコンテンツを楽しみ続けることは可能だが、よりおもしろいものが日々、外部からそして高速で訪れる状況は、そうした楽しみを色褪せさせるか、逆に内向きの結束を強めることになるだろう。それは、今日の日本の「小説（さらには文化）」を巡る状況の幾重もの写し絵—小説の中での、ジャンル間の、さらには国家と国境をめぐる未来の状況の一にほかならない。

だが、いうまでもなく、「文学」はそうした幾多の隔たりを越え、外的で高速度の刺激に耐えて残るものの呼び名でもある。狭義の「文学」の語義を越えて「世界文学」としてありうる未来があるならば、齟齬の前線にありつづけた翻訳家たちこそは、それを最も知る者のひとりであるはずだ。翻訳される作品を読むと同時に、「翻訳」という行為そのものを読むこと、それがこの特集の狙いである」(pp. 204-205)

『現代詩手帖』第 55 巻第 10 号、思潮社、2012 年 10 月

「特集 ニュートランスレーション——翻訳の詩学」

拓かれた空間のために——フォレスト・ガンダーに／野村喜和夫

『スペクタクルそして豚小屋』翻訳の方へ／フォレスト・ガンダー（吉田恭子訳）

翻訳跡地まで／吉田恭子

眠られぬ夜の海の旅——アメリカ朗読ツアー日録／野村喜和夫

野村喜和夫の仮面／クラーク＝ウェッセル

鼎談 言葉の演奏——詩の翻訳について／ジェフリー・アングルス、田中庸介、宮下恵美子

作品 翻訳マニア／四元康祐

白秋現代詩訳／高貝弘也

荒野、さようなら／文月悠光

同居人／ジェフリー・アングルス

「コロニアル・ページェントへの入り口、そこでぼくらはみんなでもつれあって」からの

抜粋／ヨハネス・グランソン（田中庸介訳）

古い詩は新訳されて食い扶持を稼げるか？／榎木伸明

詩人が翻訳家である十二の理由／関口涼子

天の青の記憶とともに降りてきた問いかけ／河津聖恵

青い空と青空、詩人と詩人——スロヴェニアでの相互翻訳ワークショップ／三角みづ紀

ランボーの詩「青春 2 ソネット」について／湯浅博雄

海に浮かぶ「言葉の小舟」——アイルランド現代詩翻訳の経験から／大野光子

『マクシマス詩篇』の翻訳について／平野順雄

翻訳考／たなかあきみつ

【編集後記】

「翻訳の特集に関連して旅の空気を伝えるエッセイや日録を掲載した。海外の詩祭における表面的な国際交流はたしかに形式的なものになりがちだが、相互翻訳というきっかけがあったり、内的な動機から生まれた海外の詩人とのつながりであったり、それぞれが意識的な開かれを持って国境を超えようとしている」

尚、特集ではないが、昭和文学会の『昭和文学研究』第65集（笠間書院、2012年9月）では、「研究展望」として山本亮介「日本文学の翻訳出版をめぐって——昭和戦前・戦中期の意味に触れつつ」が日本文学と翻訳の問題を取り上げるなかで、マンデイ『翻訳学入門』（みすず書房、2009年）や『日本の翻訳論』（法政大学出版局、2010年）などにも言及していることを付言しておく。

.....

【著者紹介】

長沼美香子（NAGANUMA Mikako）元立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任准教授。連絡先：mikakonaganuma@gmail.com

.....